

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～

梅下村塾



塾長 梅内 拓生

55

（触らぬ神に祟りなしの伝統文化）

日本には事挙げしない伝統が根強く残っている。国内を治めるには、この伝統が力を発揮してきた。しかし、幕末の開

容疑者は特定したが、中国政府は逮捕せずに微罪ですまそうというハラのようにだと知ってまた怒り心頭に発してしまった」と報じている。

国の不平等条約、第2次世界大戦前後での外交の失敗はこの日本の伝統と深くかかわっている。現在の対米国、対中国、対ロシア、対韓国への日本の弱腰へ外交の歯がゆさは、多くの日本人が感じている。これらの国々も、多くの国内問題を抱えているが、この問題が生み出すエネルギーの出口を外交に向けているように見受けられる。日本の中央政府は国内問題に関して、「知らしむべからず、由らしむべし」の態度をとっており、外国に対しては「触らぬ神に祟りなし」の態度を取っている。

人口70億を超した世界には200を超える国がある。これらの国々の人々がこの地球上で生きていくためには、共通のルールと礼節を守らねばならない。さもなければ、大国が小国を食い荒らしたり、大同土が戦争をして、お互いに致命的なダメージを引き起こすことになる。江戸時代の長い鎖国を欧米にこじ開けられて、課された不平等条約を克服して、欧米の列強の仲間入りをして、アジアに進出した日本は第2次世界大戦での敗北を機に、再び「触らぬ神に祟りなし」の文化に先祖返りをしているものと思う。

9月2日の第1面の

「世迷言」は「日本国の在中國大使の公用車を襲って日本国旗を強奪した

（流れに身をまかせる）
川柳 自選句 盛町 木村自然児 平成6年

「終章は川の流れに身を任せ」
「反省もそろそろ吾が生えはじめ」
「元気でも雨でも酒だけは止めず」

鴨長明は方丈記で「行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず 淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし」と述べているが、そこには天災と人災の頻りに起こった時代を生きた覚悟が述べてある。木村自然児の川柳は我々凡夫の生き方を詠んだものであるところに共感が湧いてくる。夏目漱石は「草枕」で「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される」と智と情のバランスのとりの難しさを述べている。

日本文化には情が過剰に含まれていると思うが、21世紀を生きるためには情と智のさじ加減に気を付けなければならぬ。

（腹を決める）
9月7日の「世迷言」では石原都知事が進めてきた尖閣諸島買い取りを映画作品になぞらえて「尖閣諸島買取物語」として述べている。

5000年の長い歴史を持つ中国は外交の駆け引きが上手である。しか

し、その強引な手口には辟易することがある。今回の尖閣問題にしても黒を白と言いつつめぐるような手練手管を使っている。

石原都知事の外交手腕には、大いに感ずるものがあり、都知事の腹を決めた深謀遠慮が伝わってくる。中国は100年前後の欧米列強の中国進出とそれに歩調を合わせた日本の中国進出を非難している。

それは歴史的事件と事実として受け止めるが、しかし、過去70年も中国の発展を支援して友好的にしてきた現在の日本を非難し続けるなら、中国が国を奪って抑圧を続けているチベット国との関係はどのように説明するのか。このように、自分に都合のよいように過去の歴史の評価をするのだけではなしに、自分の都合な面も考慮して、将来の国同士の友好関係を考えることが大切である。

このような国家間の国境問題への考え方として、投稿原稿「国境維持に果たす水産業の役割 北方領土、竹島、尖閣列島、沖ノ鳥島と南水洋政策研究大学院大学 小松正之」が熟読に値すると思う。